

# 26P-pm234

理礼氏薬物学（第十四巻）にみる薬物

○西野 正雄<sup>1</sup>、島 和嗣<sup>2</sup>、久保 光平<sup>3</sup>、畠山 貴博<sup>4</sup>、大垣 旭<sup>5</sup>、小松 知貴<sup>5</sup>、  
澤田 采佳<sup>6</sup>、小松 直登<sup>7</sup>、木村 壮太郎<sup>8</sup>、西野 ゆり<sup>9</sup>、林 優樹<sup>10</sup>、菰田 綾佳<sup>11</sup>、  
宮本 如奈<sup>12</sup>、高倉 弘士<sup>13</sup>、畠山 有理<sup>14</sup>、畠山 光弘<sup>15</sup>（<sup>1</sup>早稲田大基幹理工、<sup>2</sup>府立  
金剛高校、<sup>3</sup>四天王寺羽曳丘高校、<sup>4</sup>初芝富田林高校、<sup>5</sup>府立河南高校、<sup>6</sup>府立西浦高校、  
<sup>7</sup>府立東住吉高校、<sup>8</sup>府立藤井寺高校、<sup>9</sup>府立長野高校、<sup>10</sup>府立富田林高校、<sup>11</sup>関西福祉  
技術大、<sup>12</sup>同志社大文、<sup>13</sup>立命館大院産業社会、<sup>14</sup>長崎大薬、<sup>15</sup>畠山獣医科）

「はじめに」・・明治五年に刊行された理礼氏薬物学は、アメリカの戒施理礼著、備後福山の小林義直訳の一五冊一七巻の書物である。第十四巻全文を解読し紹介する。

「内容」・・巻十四巻では利尿薬と発汗薬を扱っている。利尿薬はコルヒキウム（コルヒキウム酢、コルヒキウム酒、コルヒキウム子酒、コルヒキウム子チンキ、コルヒキウム酢製エキス、コルヒキウム根流動エキス）、ピュッコ（ピュッコ浸、ピュッコ流動エキス）、パレーラ（パレーラ浸）、杜松実（杜松実浸、杜松実油、複方杜松実酢）、蒲公英根（蒲公英根浸、蒲公英根エキス、蒲公英根流動エキス）、エリゲロン、スコパリウス（大麻、洋芹、カロタ、アルモルシア、デルヒニウム）、テレピンチナ（樹脂、樹脂蠟膏、複方樹脂蠟膏、タール、タール水、タール軟膏、クレアソート、クレアソート水、クレアソート軟膏）、コッパイハ（コッパイハ油、コッパイハ丸）、炭酸ポトアス（酒石塩）（精製炭酸ポトアス）、重炭酸ポトアス、酢酸ポトアス（利尿塩）、酢酸ソーダ（リン酸ア、安息酸アンモニア）。また、発汗薬としては、クエン酸ポトアス（クエン酸ポトアス水、クエン酸ポトアス混和剤）、酢酸アンモニア水、甘消石精、癒瘡木（癒瘡木脂、癒瘡木チンキ、癒瘡木鹹砂精チンキ）、瑞香皮、サスサフラス（サスサフラス油、サスサフラス心、）、サルサバリルラ（複方サルサバリルラ根煎、複方サルサバリルラ根糖煉、サルサバリルラ根流動エキス、複方サルサバリルラ根流動エキス、アラリア・ノジコーリス、サンゾーシリウム、牛蒡）が上げられている。

「考察」・・江戸時代シーボルトが伝えた癒瘡木、牛蒡以外の発汗薬は見られず、同様に利尿薬においても江戸時代とはかなり異なったものが紹介されている。